三納小中学校
校長室便り

手をつなごう

令和５年１１月２７日（月）
第　１１　号
文責　校長　鮫島　良樹

教員離れ

宮崎市内の某民間放課後児童クラブでは、大学生をアルバイトで雇って、子ども達に勉強を教えています。民間ですから、それを売りにして子ども達を集めているようですが、話によると、その求人に大学生が寄ってこないそうです。時給が良いので、数年前までは教育学部の大学生が多く申し込んできたそうです。しかし近年は教育学部生なのに「勉強は教えられない」と言って、居酒屋のアルバイトに向かっていくそうです。

教職人気の低下、教員不足はマスコミでもよく取り上げられていますので、皆様もよくご存知のことと思います。でも、そのことが子ども達にどのような影響を与えるのかまでは、ご理解いただけていないのではないかと思います。

「日頃より学校教育に対するご理解とご協力を賜りまして、心より感謝申し上げます。」学校が発出する文書には、枕詞として使われていますが、何をご理解いただいているのだろうか、学校の内情は見えるようで見えにくいのではないかと思い、今回はペンを握りました。

現場の窮状、嘆き

４月のＰＴＡ総会の学校経営方針説明の中で、私は「学校は万能ではない」「教育の当事者は学校だけではない」ことをお話しました。今回は改めてそれに触れていきたいと思います。

学校には、毎日膨大な文書が届きます。多い時には、通算５百ページ以上になることもあります。行政からの通知文、各種調査の依頼文、研修会の案内文、関係機関や業者からの配付物等これらは全て、子ども達への指導に携わっている教員に対して送られてくる文書です。正直、（どれだけ学校に抱え込ませるつもりか！）と憤ってしまいます。

例えば、ネットいじめへの対応、スマホやゲーム依存への対応についての通知文。これは、そもそも家庭生活、社会生活の中で生じている問題です。「ネットで誹謗中傷の書き込みをしたらいけません。」「スマホやゲームは時間などの決まりを親子で話し合ってから使いましょう。」と一応指導はするのですが（大人の中にできていない人がいる、家庭でできないことを子どもに指導したところで空洞化するのではないか。）という空虚感は拭えません。「社会で自立していく人間を育てるのだから学校は子ども達にそのための力を養っていくべきである。」という考えが前提としてある以上、学校は社会や家庭で抱える問題をすべて受け入れ、あまねく対処していかなければならないことになります。「〇〇教育はどうなっているのか」「△△教育を推進すべきではないか」と社会から要請されれば、すべて飲み込んできたのが学校でした。「子どものために」と言われれば、断ることははばかられます。膨大な文書の量は、それを如実に表していると言えます。

さらに、先生たちの日常は大変厳しいものがあります。

- 休み時間トイレに行く暇がない、給食は５分内でかき込む
- 子どもが帰った後は会議や研修、家庭への連絡等で学級事務や授業準備にじっくり取り組む時間がない（「働き方改革だから早く帰れ」、「情報漏洩につながるから自宅に仕事は持ち帰るな」、「効率よく仕事をこなせ」と言われる）
- 一般家庭同様、自宅に帰ったら、育児や家事等に追われる
- 価値観の多様化に伴い、様々な配慮を求められる
- 配慮や指導が行き届かなかったら不平不満を言われる
- 行き過ぎた指導（体罰、暴言）をはじめ、コンプライアンス違反（信用失墜行為）をしたら処分される
- 子どもに挑戦の大切さを説くけれど、失敗に厳しい環境に置かれているので、思いきった指導は躊躇される

（教室の子どもたちのために…）と身を削り、心を奮い立たせて、毎日明るく前向きに頑張る先生たちに、世間はどうして冷たい態度で接したり、心ない言葉を浴びせかけたりするのか、校長として理不尽この上ない話だと思っています。保護者の方の愛情には及ばないものの、家庭に帰っても教室の子ども達のことを思い浮かべながら授業準備をしたり自己研鑽に励んだりしています。「ブラック」と言われようが、子ども達とのコミュニケーションの楽しさや子ども達の成長に対する喜び、達成感を「やりがい」と感じて、生きています。だから、子どもを叱れるし、一緒に頑張っていけるのです。

子どものためなのか

以前、地区の子ども会役員をしていた時、他の保護者から「おかしい！」という訴えを受けたことがあります。

「定例会や空き瓶回収、清掃ボランティアには全く出てこないのに、お菓子やお金がもらえる楽しい行事の時だけ参加する子どもがいる。さらに、子どもだけ参加させて、準備等の雑用に保護者は一切顔を出さないし、お礼の一言もない。そもそも子ども会には非協力的で、自分のことだけしか考えていない。」と言うのです。（なるほど。）そこで、該当の保護者さんにそのことを伝えると、「子どもが行きたいって言ってるのを断るというのですか？」と、思いも寄らない答えが返ってきました。ついつい私は、「他の活動に全く出席しないのは、子どもが行きたがらないからということですか。行きたい、行きたくないという子どもの意志を尊重されているのかもしれませんが、それは好きなことはするけど、嫌なことや面倒なことはしないという意識を助長させているのではないですか。自由ではなくてわがままではないのですか？」とヒートアップのあまり、正論をぶちまけてしまいました。そして、その後は売り言葉に買い言葉の繰り返し。残念ながらこういう状況に陥ってしまったら、相手の方は自己保身、正当性を貫こうとするため、こちらのちょっとした言い回しや態度を敏感に切り取り、筋違いの部分で是非を問おうとする対抗姿勢に終始します。良くて平行線、最悪な場合は禍根を残して以後の交流はシャットアウト。私は、この方と顔を合わせることは二度となくなりましたが、人と分かり合えるようにすることの難しさを学んだ機会となりました。

理想と現実の狭間で

価値観の多様化や個性の尊重が強く叫ばれるようになった昨今、学校でも様々な葛藤が巻き起こっています。起因するものは「教育は子どもの個性や特性に応じて行われるべきである。」という、ある意味時代に即した正論です。しかし、現実は、そんなにきれいに収まりません。上記の理想を追求していくならば、「子どもが自由に選択できる環境や方法を整えていくこと」が求められます。但し、実現していくためには、クリアしていくべき難問がいくつも立ちはだかります。公教育は、すべての子どもにとって平等に機会が与えられなければならないという前提があるからです。難問の例として…、

- そもそも教員不足。さらに現場の教員には余裕が一切ない。
- 特別支援教育の視点から、特性に応じる「合理的配慮」がある。これは、本人や保護者が求める際は必ず取り入れなければならないが、周囲の者にとっては（理解がなされなければ）特別扱い、不平等と感じられる。その合理的配慮の１つに、「環境を選ばせる」「落ち着くまで別室でクールダウンをさせる」等があり、これは、「自分の思いのままに振る舞っている」ように見られる。
- 将来、子ども達の出ていく社会（職場や地域）は、個人の欲求に応じて何でも思いのままにできる社会になっていない。むしろ社会には法やルールがあり、公益を優先して、自分の欲求を抑えざるを得ない、適応せざるを得ない部分がある。そして、それは「我慢」や「耐性」として社会生活を営む上で必要とされる能力でもある。

紙面がなくなってしまいました。正解のない世の中で、人と支え合って生きていくのは難儀なことであります。教育の当事者同士、互いに感謝し、尊重し合いたいと思っています。